

せんじゅかんのんざざう つけたりだいざ すし
千手観音坐像 附 台座、厨子

種 別 彫刻 附工芸品
指定年月日 令和8年5月28日
所在地 那谷寺 (那谷町)

那谷寺の秘仏本尊として伝わる。千手観音という複雑な姿を、まとまりよく造り上げる秀作である。ボリューム感のある髪や、きれいに髪筋を刻む表現、理知的な面相、各所に認められる写実的な衣や衣文線の表現などから、制作期は鎌倉時代と考えられる。

面相などをはじめとして、全体に童子を思わせる作風が感じられる。千手観音と童子の関係は、和歌山・粉河寺縁起^{こかわでらえんぎ}をはじめとして知られるところで、本像にもそのような背景が存在する可能性があり留意されるところである。

鑄造技法に関しては頭部に鉄心と中型土が残り、左体側部肩下がりに型持ちの方形穴、左脚部側面に^{こうがい}筭が残る。さらに調査が必要であるが、左右体側肩下がり部で方形型持ちを、左右脚部側面で筭を用いて外型と中型を固定した、^{ろうがた}蠟型鑄造と思われる。銅厚は薄く、鑄上りも良好である。鎌倉時代鑄造技法の研究上でも重要である。

また、本像については、『加州那谷寺縁起』(寛永19年(1642)定憲筆、享保5年(1720)写、那谷寺蔵)に「後光・台座・厨子・^{からきぐうでん}唐木宮殿、金銀珠玉をもって莊嚴をなし、...以下略」とあることから、この頃から台座・厨子が一式で安置されてきたものと考えられ、通常は台座に設置された状態で厨子に納められている。



千手観音坐像



附 台座



附 厨子